

WALTER BAGEHOT
A Study of his Life and Thought
together with a Selection from his
political writings No. I

by Norman St. John Stevas

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

著者による序文

ウォルター・バジョット (Walter Bagehot) への私の関心は、19世紀の文芸と政治思想に関する古典的作品の1つである、『イギリス憲政論』(*The English Constitution*) という著作によって初めて喚起された。この関心は直接に19世紀を扱った著作のみならず、週刊誌や新聞においてバジョットがたえず言及されていることによって増々強められた。死後90年たってもなおこのように常に引用されるという名誉に与るこの人物とは何物であろうか。彼の全集を検索しに大英博物館附属図書館まで私の足を運ばせた決定的な動機は、G. M. ヤング (Young) の評論、『最も偉大なヴィクトリア朝時代の人間』(*The Greatest Victorian*) であった。この作品で彼はジョージ・エリオット (George Eliot), テニソン (Tennyson), マシユー・アーノルド (Matthew Arnold), ダーウィン (Darwin) それにラスキン (Ruskin) に与えられた世間一般の評価を検討した結果、彼らを否定して、バジョットをより高く評価したのであった。「広範に渡って重要な階級を代表し、時代が育成した様々な能力に富んだ人間がわれわれには必要である。彼は他の人々よりも傑出し、現在生きているわれわれにも影響力を及ぼし、指針を与えている人物である。これらの要素が、過去を

振り返って後代の人間が昔の真に偉大な人間を見きわめる際の特徴であるとしたら、ヴィクトリア朝時代の名立たる人物の中で、それらを最もよく例証しているのは誰であろうか……われわれはその時代に生き、時代の1部を形成し、しかも他の時代には輩出しなかったであろうような人間を捜している。つまり共感する力を持ち、判断力と意見と行動における天才、親近感を抱かせないほど著名であったり、完成された人間というのではないが、その思想が根づき、今日でもなお実を結んでいる人物、次々と気まぐれな人間の精神を通過しながら、その影響力がヴィクトリア朝文明の最も貴重な要素、すなわち強健で活力にあふれた理性を今なお伝え、知らしめることのできる人物を捜している。そのような人物がかつて存在していた。私はその地位をウォルター・バジョットに授けよう」とヤングは書いている。

私はバジョットの義妹のバリントン夫人 (Mrs Russell Barrington) によって編纂され、1915年に出版された9巻から成る彼の著作集を大いに楽しみながら通読した。しかし5巻目に入っている彼女の著した伝記に私は多少不満を感じた。1915年にその書評を書いたケインズ卿 (Keynes) はこう記している:「私自身はあまり興味がないが、身内の人間によって集められた題材は、未来の全ての伝記作者にとって大いに有益となろう」。『未来の伝記作者』バカン卿 (Alastair Buchan) は現在新しい伝記を執筆中で、彼の助言と知識に私は少なからず助けられたが、バジョットの著作は長い間殆んど全て絶版になっているので、今日まで全集の中に埋もれていたり、忘れ去られたいくつかの雑誌のページに葬られた彼の評論のいくつかを彼の生涯と思想の研究とともに読者に提供することは有益なことであろうと私は考えた。私のこのアイデアは多くの出版者に拒絶されたが、ジェロルド氏 (Dougias Jerrold) が寛大にもそのような著作の潜在的な価値を認めて、快よく出版に同意して下さった。この書物はその成果である。

私は『イギリス憲政論』を取り上げて、その周りに政治的主題に関するバジョットの主要な評論を配置した。彼の政治思想の本質的素を明らかにし、同時に彼の目を通して観察された19世紀の政治の世界を描写しようと努めた。『メ

アリー・ワートリー・モンタギュー夫人』(Lady Mary Wortley Montagu)と題する彼の評論からの抜萃は格好の出発点となっており、後に根本的変革を蒙ることとなった18世紀の政治の世界と社交界の巧みな縮図となっている。ブルーム (Brougham) とピール (Peel) についての評論は、それぞれ1830年代と50年代を描き、『イギリス憲政論』は60年代の政治制度の働きを描写している。グラッドストーン (Gladstone) とディズレーリ (Disraeli) に関する二つの短い抜萃は、19世紀後半の政界を描いている。最後の評論は当然一部は初期の評論に含まれるのであるが、バジョットの政治思想と理論の概括的でより思弁的な性質を明らかにするよう意図されている。

この書の最初の部分で私はウォルター・バジョットの簡単な伝記を読者に示し、続けて彼の著作と性格の両方の魅力を考察している。彼の宗教上の信念と文芸批評家としての重要性の評価をも試みた。彼の経済に関する著作は、その政治思想を論ずる際の手短かな前奏曲と当時は考えられていた。最後に、私は『イギリス憲政論』を取り上げて、まず出版された当時のバジョットの分析の正しさを、次に1867年以降、イギリスの政体に起った主要な変化のいくつかを論じている。この書を出版するにあたって、まず『内閣』(*Cabinet Government*)を著したジェニングス卿 (Ivor Jennings) に、次にジョージ5世の伝記の作者であるニコルソン卿 (Harold Nicholson) に感謝の意を表したいと思う。両著からの裨益、大いなるものがあつた。この書物が単に歴史と憲法を学ぶ者たちのみならず、我が国の歴史における最も魅力的な時期、19世紀に魅かれる全ての人々にとって興味深いものとなることを祈っている。この書の反応いかんによっては将来、文芸と経済についてのウォルター・バジョットの著作に関する増補改訂版が出版されることもありうると思う。

ウイルソン大統領 (Woodrow Wilson) はバジョットに傾倒するあまり、その生誕地と墓を訪ねるために ラングポートまで私的な旅をしたほどの人物であるが、次のように記してバジョットへの並々ならぬ敬意を表した。「もし私に人材を養成する権限があるなら、理性に富み、賢明で洞察力にあふれたウォルター・バジョットのような人間と実務についての批評家をもっと育成したいも

のだ」。同じエッセイの中で彼はこう付言している。

「バジョットの作品を読んだことのない人々に彼を紹介するのは、非常に喜ばしい幸運である。君の友人にバジョットを知ってもらうことは、彼に歓びを追求するよう 勧めるようなものである」。まさにこのような 精神をもって私はこの書を読者にお贈りしたいと思う。

WALTER BAGEHOT 1826—1877 Biography 伝記

ウォルター・バジョットは1826年2月3日、パレット河沿いにあるサマセットシャーの小さな町、ラングポートに生まれた。バジョット家は古くからのノルマン系一族で、その名は the Battle Abbey Roll にも見出されるが、彼らがラングポートに定住するようになったのは、18世紀中頃になってからであった¹⁾。ウォルターの父、トマス・ワトソン・バジョット (Thomas Watson Bagehot) は、1772年ラングポートに創立されたスタッキー家族銀行の共同経営者であり、この銀行は後にイギリスで最初の株式組織の銀行の一つとなった。トマス・バジョットは自ら銀行経営に携わり、一家は銀行の建物の二階に居住していたので、ウォルターは文字通り、銀行の中で生まれるという奇妙な特権を有していたのであった。その銀行はイギリス南西部一帯では広く名が知られており、1909年パー家族銀行との合併で紙幣発行の権利を失うまで、独自の紙幣を発行していた。しばしばサマセットシャーの住民たちは『よそ者の』イングランド銀行発行の紙幣を受け取るのを拒絶し、『スタッキー 銀行紙幣』での支払いを要求したものであった。ウォルターの母、エディス (Edith) はその銀行を創立したサミュエル・スタッキー (Samuel Stucky) の姪であった。彼女は初め18才の若さでブリストルのジョセフ・エストリンと結婚したが、夫の死後38才の快活な未亡人である彼女は、10才年下のウォルターの父と再婚した。夫妻の長男ワトソンは3才で死亡したが、二人の間の唯一の子供となったウォルターは幸いにも生き長らえた。その結婚はほぼ150年間に渡ってラングポートの町を支配してきた両家を結びつけることとなった。ラングポートの東の丘の麓に、現在は修道院となっているスタッキー家の邸宅があったが、ウォルタ

ーが誕生して数年後にトマス・バジョットは町の西端を見下ろすハーズ・ヒルに新築された家に移り、一家の名声は恒久的な建築物の形となって残ることとなった。

ウォルターと両親との関係は幼年時代から幸福そのものであり、このような関係は終生変わらなかった。彼の父は息子を『最大の宝』として敬愛し、息子もその愛に充分報いた。父と息子は実業と政治に共通の関心を抱いていたが、二人の知的交わりはこれらの問題に限定されずに、両者は共に宗教や哲学に関する議論を楽しみ、文学を愛好した。事実、多くの点で二人の関係は父と子というよりは、むしろ兄弟の間柄のようであった。トマス・バジョットは実務に携っていたために、読書のための余暇を殆どとれなく、時折病に倒れると、それが読書の機会を与えてくれたのだと歓迎した。1842年彼の妻の神経症のために、「自分が病気になったときほど喜ばしい気持を感じたことはなかった」のは残念だとウォルター宛の手紙に書いている。ウォルターは父から知的好奇心を受け継いだが、その興味を持続させる熱情と精神の活力とは母譲りのものであった。エディス・バジョットはインテリ女性ではなく、そのために多くの問題に強硬な意見をもっていたが、快活さとユーモアにあふれ、このような気質は全て息子に継承された。ウォルターが父と分かち合った知的交わりは、どちらかと言えば彼女には与り知らぬものであったが、彼女もまた暖かい愛情を息子に注ぎ、ウォルターも精一杯それに答えた。このような堅固な家族の愛情の枠の中で、ウォルターの感情は訓練され、発達していったが、そのことがともすれば彼の強い情熱的気質のせいで情緒不安定になるのを抑制したのであった。

しかしながら、彼の家庭生活は全くの至福に満ちたものというわけではなく、苦悩と不安のために家庭の幸福に影がさすこともしばしばであった。その評論の中で彼はたびたび人生の『暗い現実』について言及しているが、このことは彼の母の狂気の発作を暗示している。母の身を案ずることの他に、彼は自身の精神的不安定にも懸念を抱いていたが、それは彼の若い頃の遊び友達で、異父兄にあたり、精神薄弱であったヴィンセント・エストリンによって増大された

に違いない恐怖感であった。この当時のバンク・ハウスでの生活は遠縁にあたる、ヘンリー・ソーテル (Henry Sawtell) がウォルターの妻に宛た手紙の中に描かれている。「私は (バンク・ハウスの玄関のすぐ上の二階にある部屋) ととても風変りに、そして明らかに沈思黙考していることを伝える目的で行われていた彼の (ウォルターの) 勉強の場面を見せられたことがあった」と彼は書いている。彼は20個もの時計を周りに置いてカチカチいわせ、正確に時報を知らせながら (そのようなことは時間についてのヴィンセント・エストリンの気まぐれから生じたものであった) 『算数の勉強をし、母親は不憫なヴィンセントのためにかん高い声で、できるだけ速く『クエンティン・ダーワード』を読んで聞かせた²⁾。この秘かな悲しみがウォルターの生来の明朗さを抑え、内気な性質を発現させた。「人生におけるあらゆる困難も狂気に比べれば、ただの笑いごとにしすぎない」と彼は後年述懐している。しかしそのことは彼の感受性と同情心を強めるという積極的な効果をもっており、プラス面がなかったわけではなかった。彼の母は晩年には朝食時に突然ものが言えなくなって、ウォルターに話しかけられないという妄想に取りつかれるようになった。彼女はそのようなときは伝言を走り書きできるような石板を用意して首の周りにそれをぶらさげて、ウォルターが書き物をしている勉強部屋の入口に現われた。彼が不意に顔を上げてこの幻影を見つけると、二人とも急にわっと笑い出したものだった。バジョット夫人をとらえていた口がきけないという妄想は、ただちに消えて、彼女は全くの正気の状態で喋ることができた。

ウォルターの両親は共に信仰心が篤かったが、信条に関して意見を異にしていた。18世紀の間、ソシヌス教 (イタリアの16世紀神学者 Laelius Socinus とそのおい Faustus Socinus の唱えた説で、三位一体、キリストの神性・悪魔の人格、人間の原罪を否定した点で近代の Unitarianism に似ている：訳註) 的な傾向がバジョット家に浸透しており、それは後の時代の正統主義に圧倒されたものの、トマス・バジョットは非国教徒、すなわちユニテリアン (キリスト教新教の一派。三位一体説を否定して唯一の神を主張し、キリストを神と認めないもの。宗教改革後に起り、一派をなし、英国、米国などで盛んになった。：訳註) に改宗した。一方、彼の妻は英国国教

会の信者として育てられ、終生忠実な教会員であり、夫の薄弱な信仰にはただ軽蔑だけを抱いていた。このように家庭の雰囲気に分かれていたので、ウォルター自身の信仰にも幾分、分裂がみられた。日曜日の朝にはハーズ・ヒルの自宅の客間で父親によって司式されるユニテリアンの礼拝に出席し、午後は母親に連れられてラングポートかヒューイッシュ・エписコピで毎日曜、行われる国教会の礼拝に通った。そのうえに父親の姉で、ウォルターが大変敬愛した伯母のレイノルズがカトリック教徒とその陰謀に対してしばしば痛烈な非難を行って、彼を大いに喜ばせた。ごく幼いときからこのように教義に関して折衷的な雰囲気の中に投げ込まれていたのも、ウォルターは信仰心の篤い人間ではあったが、宗教に関する見解において著しく超絶的な態度をとり続けたのは驚くにあたらない。このような養育がバジョットを独断家にするのを救っていたのであろう。

家族の次に、彼の青年期に性格形成にかかわる最も強い影響を及ぼしたのは、サマセットシャーの田舎であって、彼はその地を生涯愛し続けた。「バジョットはイギリス南西部の特徴を最もよくあらわす郡が、それらを最も多く身につけた若者たちに与えている、自然の豊かさと生命の外的輝きに対する愛をもったサマセットシャーの人間であった。イギリス南部の活気と風景の暖かな色調は、確かに彼の趣味と恐らくは文体をも形成するのに大いに貢献したのだ。」トリチャード・ハットン (Richard Hutton) は記している³⁾。今日でもサマセットシャーは人里離れた郡で、独特の生活様式と地方訛りを保存しているが、ウォルターの若い頃はそこはイギリスの他の地方から隔絶されたひどく辺鄙な地方で、独自のユニークな生活習慣を遵守しており、彼は常にユーモアをこめてその価値を認めていた。彼はラングポートの住民たちが、議員の給料支払いの節約のために代議士選出権を返上したいと、エドワード I 世に請願書を提出したことを飽きずに繰り返し語ったものだった。サマセットシャーの田舎の人々とクリミア戦争についての話も、同様に熱心に語られたものだった。「その戦争を勝利のうちに終結させるチャンスについてのサマセットシャーの住民の見解は次のようなものである——

土地の人：『ロシア皇帝の年齢はいくつかね。』

私：『63才ぐらいだろう。』

土地の人：『それではどうやっても 皇帝を捕えることはできんだろう。ロシアはとてつもなく大きな国だそうだから、もし皇帝がロシアの中心部まで逃げて行けば、どんな方法でも捕えることはできないものだ。』

私は列車が来るまで（そこは駅だったのです）おしゃべりをし、ロシア皇帝を捕虜にせずとも戦争が終結しうることを教えようとしたが、効果がないのではと思いなおした。しまいには彼は私が客車に乗り込むときに、『あんたさんがおっしゃるように、いつかわが軍が皇帝を捕えることができればいいがね』と言ったものだ⁴⁾。

トマス・バジョットは初めからウォルターには自由で健全な教育を享受させようと心に決めていた。1842年12月、ウォルターのブリストル・カレッジ卒業間近の頃に息子に宛た手紙の中で、彼は次のように述べている。「今日要求されている教育は幅広い基礎のもとに築かれねばならない、また体をつくるための十分な時間が与えられねばならない。毎日、私はお前に授けたいと思うような教育を受けられなかったために、どれほどの損失を蒙ったかということを考える。だからお前はそその利点を獲得するのに何ものかが自分に欠けているのではないかと心配する必要はない。私の見たことのないような世界がこの世にあり、知識と実用の世界は私の人生よりもっと多くの幸福をもたらすであろうと思うが、そのことに対して私は恨みがましいことは言わないつもりだ」。ウォルターが5才になると、トマス・バジョットはその世話をするために実庭教師のジョーンズ嬢（Jones）を雇って息子の教育を開始した。8才か9才のときにウォルターはラングボートのグラマー・スクールに通い、その有能な教師であるクエケット氏（Quekett）の教えを受けた。様々な学課は彼の活発さを損わなかった。というのは、ソーテル氏の記録によれば、この頃は彼の母親が或る日の『ホーム・パーティ』で息子を自慢したいと思ったとき、彼は敏捷に大きな木によじ登り『驚かすようにてっぺんの太枝から集った人々をじっとみ

つめて』そこに坐っていたのだから⁵⁾。彼の政治に対する関心はすでに強まっており、母親がロンドン訪問中の1838年5月18日付けの手紙の中で次のように書いている。「お母さんの留守中も万事うまくいっています。お父さんと僕はR・ピール卿や小さな女王（ビクトリア女王のこと：訳註）について楽しいおしゃべりをしています」。当時はBedchamber論争のあった時代で、バジョット家は皆、断固『小さな女王』の味方であった。

1839年、13才の年にウォルターはブリストル・カレッジに入学し、1842年まで在籍し古典、数学、ドイツ語、ヘブライ語を勉強した。彼は才気煥発な学生であって、母親の親類にあたるプリチャード博士（Prichard）の推挽により、当時クリフトンズ隆盛をきわめていたカーペンター博士（Carpenter）、アディントン・シモンズ博士（Addington Symonds）、エストリン氏（Estlin）が率いる学会に入会することができた。在学中も両親との定期的な手紙のやりとりは続き、強固な自由貿易論者であった父親と政治問題について議論した。高名なブリストル市民であるエドワード・フライ卿（Edward Fry）は学生のウォルターを次のように描写している。「初めてバジョットを知ったとき、彼はほっそりした若者で足はどちらかというといひろ長く、非常に快活な顔つきをして、いつも人目を引く大きな目が特徴であった。そしてその目に関して彼はあるとき楽しい思いつきを抱いた。彼はクラブ・ロビンソン（Crabb Robinson）がそのあごのおかげで弁護士として成功したのなら、私は目で同様のことをしたいと思うとよく語っていた」⁶⁾。

1842年10月、16才のときにウォルターは上京してロンドンにあるユニヴァーシティ・カレッジに入学した。オックスフォードとケンブリッジの両大学は、父親が反対した教義テストのために入学対象より除外されていたからである。ガウアー街のうらびれた地域に2、3年前建てられた『神無き』大学であるユニヴァーシティ・カレッジは、当時まだ改革されていない由緒ある大学よりもはるかに生き生きとし、知的な刺激に富んでいたからである⁷⁾。ロンドンは青年にとって知的刺激に満ちたところで、ユニヴァーシティ・カレッジ自体にはその刺激を十分に有効なものとする、活気にあふれた独創的な教育があった。

若い人々が純粋な学問への情熱を育むには、都心から離れた田園都市の静寂が必要であるとしばしば言われる。しかし少くともこの点に関して、ガヴァー街やオックスフォード街、ニューロードやユーストンからブルームスベリーまでの一続きのもの寂しい地区は、森閑とした修道院やケンブリッジとかオックスフォードの花が咲き乱れる川沿いの牧草地と同じく白熱した抽象的な議論の場であった。かつていわゆる論理的恒等式（AとAである）は『理論的推論の原則』の名に価するのか、或いは言語の必要条件にすぎないのかということに関して議論が白熱したとき、バジヨットと私はオックスフォード街を見つけようとしてかれこれ2時間もリージェント街をあちこちさまよって、結局辿り着かなかったことがあった。⁸⁾とバジヨットの大学時代の3人の親友の1人であるハットンは述懐している。

後の『スペクティター』誌 (*The Spectator*) の編集者であり、終生の友となったリチャード・ハットンの他にウォルターはウィリアムス・ロスコー (William Roscoe) とティモシー・スミス・オスラー (Timothy Smith Osler) と親交を結んだ。ユニテリアン派の信者であるロスコーとハットンと共に彼は討論会を創設し、活発な宗教討論会を開き、ロマン派の詩人に対する共通の関心を分けあった。1843年彼は古典を聴講し、ハットンと共に三人の第一級の一人となった。しかし健康状態が悪化したために秋学期を休学し、1844年の初めまで大学に復学しなかった。7月に伯母のレイノルズ夫妻とベルギー、ドイツからスイスまでの彼にとっては初めて短い海外旅行をした。アントワープでルーベンスの描いた『十字架上のキリスト』に感動し、「涙がとめどもなくあふれて、もはや眺めることもできないほどであった」。イギリスに帰国するとまもなく再び健康が勝れなくなり、1846年まで学位取得を延期し、その年再び第一級となり、修士課程で研究を続けるべく、奨学金を獲得した。彼はグレート・コラム街に寄宿し、主知哲学、道徳哲学の研究を開始し、特にカントに興味をもつようになった。1848年マスター・オブ・アーツの学位を取り、哲学で金メダルを獲得した。「哲学を専攻することにより、後年の彼の才人ぶりをいかになく証明することになる、政治経済学の諸原則を初めて修得したのである」とハ

ットンは記している。この頃は著述家としての経歴を開始した時期で、1847年から48年にかけて、彼の最初の二つの論文、『通貨論』(*Currency*)と『ジョン・スチュアート・ミル論』(*John Stuart Mill*)が友人のウィリアム・ロスコーの編集する『プロスペクティヴ・レビュー』誌(*The Prospective Review*)に掲載された。

1848年12月終りにかけて、彼の年長の友人であるプリチャード博士が72才で死去した。ブリストル滞在中にウォルターは後にベイリオル・カレッジの特別研究員となったプリチャード博士の息子のコンスタンティン(Constantine)と親交を結び、そのカレッジをしばしば訪れたが、ウォルターにアーサー・クラフ(Arthur Clough)を紹介したのは、このコンスタンティンであった。ハットンの言葉によれば、クラフはウォルター・バジヨットにとって彼と同時代のいかなる人にもまして大きな知的魅力をもっていた。1848年11月にクラフはオリエル・カレッジにおける特別研究員の地位を辞していたが、フランシス・ニューマン(Francis Newman)がウォルターもその創設に手を貸していた、ロンドンのユニヴァーシティ・ホールの学寮長の職を辞任していたので、その後任としてクラフが選ばれた。ウォルターはこの当時は法律を研究しており、その後2年間は年長の友人との交際を続けた。バジヨットにとってクラフの魅力とは何であったのだろうか。ハットンが再びその解答を提供している。「私が思うに、バジヨットにとってクラフの大きな魅力は、これまで殆ど認められずにいたのがある程度再発見され、再認識された詩人として、彼が真理を発見することの測り知れない困難さを感じていたことである。そしてその困難さは、やや逆説的なことに真理に対する純粋な情熱の強さによって弱められるよりもむしろ強化されたものであった。その欲求が強ければ強いほど、われわれが『信じたい』と思うものが真実であると確信することによってそれを不合理に満ちし、人間に関する諸々の事象が現実はいかに複雑混沌としたものであるかを閑却する危険性が増すものであると彼は教えている。⁹⁾」ウォルターの精神は全く偏見にとらわれない超越的なもので、道徳や教義に関してのクラフの冷静な中立性はウォルターを魅惑し、深い影響力を与えたが、ウォルターは強靱な

良識のおかげでクラフが生涯ずっと甘受した精神的な浮動状態の立場に置かれることはなかった。とは言うものの、ウォルターをして『意志の破壊力』(the *ruinous force of the will*) という恐怖に最初に覚醒させたのはクラフであり、このことは後年の彼の思想と著作の多くに影響を与えることとなった。

ホール氏 (Hall) の弁護士事務所 で 6 ヶ月働いたのちに、ウォルターは後年高等裁判所判事となったクエイン氏 (Quain) の事務所に移った。彼は法律にはあまり熱中できず、それを固苦しいものと考え、のちに弁護士を廃業した友人のウィリアム・ロスコーに宛た手紙の中で、かつて自分が法律書を開いて法律の世界に首を突っ込んだことを後悔していると認めた。父親はウォルターが一家の銀行に入行することを願い、ウォルターの方でも母親の面倒をみることを望んでいた。1852年8月31日、彼は『金輪際きっぱりと』法律とは縁を切る決心をしたと父親に書いた。彼はかつて『人生におけるシャンペンのようなもの』(the champagne of life) と書いた特別事実の訴答 (Special Pleading) の権利を断念することへの痛恨を除いて、後悔はあまり感じなかった。「これまで私が知り得たことは特別事実の訴答だけでした。そして私がそれを修得するとすぐに法の改革者たちはそれを台なしにして廃止してしまったのです」¹⁰⁾と学友のキリングルー・ウエイト (Killingrew Wait) への手紙の中で彼は書いている。事実、彼は特にあらゆる細目的な事柄に強い嫌悪を感じていたので、その特異な天分は法律家生活とは合わなかったであろう。「最後まで彼は校正刷りをうまく校正することができず、必らず文体上のちょっとした不正確なところ、不調和で杜撰な点を多く未訂正のままにしておいたものだった。またある時は、自分は計算が合ったためしがなく、大学での数学の問題ではいつも些細なところで間違いをおかしていたと言明したことがあった」とハットンは書いている。

1851年の初め頃、ウォルターは憂うつ症にかかり、将来に対する不安感に悩まされた。ハートリー・コールリッジ (Hartley Coleridge) についての評論の中で、彼は当時の自己の精神状態をよく表わしている、キーツ (Keats) の『エンディミオン』(*Endymion*) の序文からの一節を引用している。「少年の

想像力は健全である。大人の成熟した想像力も健全である。しかしその中間の人生には空白があり、そこでは魂は動揺し、性格が定まらず、生活様式も不確かで、野心は曇りがちである」¹¹⁾。

このような苦境に陥ったものの、1851年8月ウォルターは賢明にもロンドンを立ってパリに向った。彼はちょうどよい時期にパリ訪問を行ったのであった。というのは、12月のルイ・ナポレオン (Louis Napoleon) のクーデターは彼の重く沈んだ心に充分な気晴らしを与えたからである。パリから彼はラングトン・サンフォード (Langton Sanford) の編集するユニテリアンの雑誌である『インクワイアラー』誌 (*The Inquirer*) に書簡形式による七つのすばらしい評論を発表した。その評論で彼はカトリック教会を賛美し、ルイ・ナポレオンの武力の行使を弁護し、フランスの出版界の自由を攻撃して、フランスは議会政治には全く不適格であると主張したために読者の憤激を買ってしまった。その書簡は軽薄な冷笑主義と深遠な良識との奇妙な結合である。「それらは大変重大な問題について軽々しく浮わついたものですらあった。その評論は皇帝の偽誓を黙認し『インクワイアラー』誌の読者の信頼を踏みにじり、バジヨットの意見に読者が反感を催すであろう箇所では彼らの共感を仮定しているのである」¹²⁾とハットンが記している。クラブ・ロビンソンはのちにウォルターについてハットンに語ったときに、「君のあの例の友人——誰のことか分かるだろう——クーデターについてあの忌まわしい、最も恥知らずな手紙を書いた奴さ——あれ以来ずっと彼のことを宥すことはできない」と述べた。その書簡が彼の友人たちに与えた効果がどのようなものであれ、それらはウォルターにとって一種の心理療法となっており、1852年彼はイギリスに帰国し、心機一転、気力を回復して法曹界を去り、一家の銀行の業務に携わる決心をした。

ウォルターは自らの決断をけっして後悔することはなかった。彼は後年、『ロンバード街』 (*Lombard Street*) (1873) の中で次のように書くことができた。「銀行業務は不断の注意を要するが、骨の折れる仕事ではない。大きな銀行の経営者でさえ、その業務が全て堅実であるとの確信を抱くことができ、しかもなお多くの趣味をもてる。彼はその時間の幾らかを、また思考のかんがりの部分

を容易に別の研究にささげることができる。そしてロンドンの銀行家はその気になれば、世界中で最も知的な社交界の一員にもなれる。恐らくロンドンの民間の銀行家ほどに幸福な地位はないであろう、そしてそれ以上に幸福な地位は恐らくないであろう」¹³⁾。その間に彼は銀行業務の技術の習得に取りかかった。1853年1月、既に結婚していたハットン宛にこう書いている。「私はこの4ヵ月間というもの殆どもっぱら複式簿記の技術の習得に自分の時間を費してきました。その理論は納得できるのですが、実践面となると多分何にもまして凄じいものでしょう。私は計算というものは見解上の問題にすぎないと主張していますが、無駄なようです。ここで私の管轄下におかれている人々は、偶発的な問題の性質を理解せず、数字はある一つの結果だけを生み出すものであると証明しようとしています、私はその数字が常に違って出てくるので、それは間違いであると思います。しかし無教養な人間の直感的な独断論に感化を及ぼすことは不可能です。その他の点では私は商人の生活に満足を感じています」¹⁴⁾。

——次号に続く

翻訳に当っては、次のテキストを底本にした。*Walter Bagehot: A Study of his life and thought together with a selection from his political writings* by Norman St John-Stevas (Eyre & Spottiswood, London, 1959)

原文註：

- 1) バショット Bagehot という名はあたかも 'g' 音が硬音であるかのように時として発音されるが、これは誤りである。その名は badger のように軟音で発音されるべきで、実際 badger は15世紀における家名の異形であった。ウォルター・バショットの義妹であるラッセル・バリントン夫人は、リチャード・バショットという人物のことを別名 Badger. または Baghott と呼んだが、当時はその一族はグロウセスターシャーのプレスバリーにおける資産家であった。ラングポートを訪れたとき、私はウォルター・バショットの死の直後ハーズ・ヒルの庭師に任命された父親をもつ、スティシー姉妹によってバショットが常に軟音の 'g' を入れて発音されていたとの確証を得た。このことは別の地方における証言とバショットの甥で現在トントンに居住している、ガイ・バリントン氏によって追認された。軟音の 'g' で発音されるという証拠はこのように動かすことができないほどであり、私はこれを最後にこの文章がかしましい議論に終止符を打つことを願っている。現在80才のバリントン氏は伯父のことを今でもはっきり記憶している。彼がバショットに最後に会ったのは、ハーズ・ヒルで一緒に朝食をとったときで、バリントン氏は当時7才か8才であった。彼が私に語ってくれたことによると、彼は卵を割るのに難儀していたが、伯父が次のように言ってもっと頑張るように励ましてくれた。「さあ続

けて、ガイ、頭でしっかり叩くんだ。その卵には味方がいないのだから」。

- 2) Letter of G.H. Sawtell to Mrs. Walter Bagehot, May 29, 1882: *The Life*, p. 64.
- 3) Richard Holt Hutton, *Memoir: The Works*, I, p. 11.
- 4) *The Works*, I, p. 36.
- 5) *The Life*, pp. 64-5.
- 6) *Ibid.*, p. 85.
- 7) オックスフォード運動はニューマンがリトルモアに戻った1842年を頂点に衰退していった。
- 8) R.H. Hutton, *Memoir: The Works*, I, p. 4.
- 9) *Ibid.*, p. 22.
- 10) Letter of Januasy 5, 1853: *The Life*, p. 21.
- 11) *The Works*, I, p. 196.
- 12) *Ibid.*, p. 25. その書簡はバジョットの政治思想を考察する際により入念に論じよう。See pp. 49-50.
- 13) *The Works*, VI, p. 165.
- 14) *The Life*, p. 213.